

經濟論叢

第七十六卷 第六號

第二ラドイツ蜂起について……………穂 積 文 雄…(1)

レーニンのブルジョア革命理論(2)……………堀 江 英 一…(22)

ソロルド・ロジャーズについての一研究……………岸 田 理…(43)

〔昭和三十一年十二月〕

京 都 大 學 經 濟 學 會

レーニンのブルジョア革命理論(二)

——マルクス主義におけるブルジョア革命理論の發展(四)——

二 ロシア第一革命期

堀 江 英 一

ロシア第一革命は一九〇五年一月にはじまったが、それはツァーリズムと農奴制度の遺物とを拂拭しようとする民主主義革命であり、たたかう大衆の先登にはまごうかたなくプロレタリアートがたつていた。社會民主黨はこの革命におけるプロレタリアートの戦術を決定するために、一九〇五年四月、ボルシェヴィキはロンドンで社會民主黨第三回大會を、メンシェヴィキはジュネーヴで協議會をひらいた。一九〇五年六―七月のレーニンの『民主主義革命における社會民主黨の二つの戦術』は、ボルシェヴィキとメンシェヴィキとのブルジョア革命戦術を比較するというかたちで、ボルシェヴィキのブルジョア革命戦術を完成したものである。レーニンはまたこの大會に『農民運動にたいする社會民主黨の態度』という決議案を提出して、ブルジョア革命戦術の鍵である農業綱領を前進させた。こうして社會民主黨第三回大會で、レーニンのブルジョア革命の戦術理論は、これまでとかなりちがったかたちで、マルクス・エンゲルスの正統理論を發表させて、完成された。

革命は一九〇五年十二月武装蜂起の失敗を境として後退期にはいつたが、この時期の政治的分析と戦術とを決定するために、ボルシェヴィキとメンシェヴィキは一緒になつて一九〇六年四月に社會民主黨第四回（統一期成）大會をひらいたが、レーニンはその前月の三月に『労働者黨農業綱領の再検討』をかき、あらかじめメンシェヴィキその他に對する自分の新しい農業綱領のただしさを證明しようとした。これが敷行されたのが革命後の一九〇七年の一一―十二月に書かれた『一九〇五年―七年のロシア第一革命における社會民主黨の農業綱領』である。だからこの書物は革命の經驗の整理からだけうまれたのではなく、第一革命の指導方針を解説したものである。この二つの書物は、さきの『二つの戦術』で展開したブルジョア革命戦術を農業綱領に適用し農業綱領として確定したばかりでなく、レーニンはそれを『ロシアにおける資本主義の發展』を一步すすめた理論――いわゆる二つの道の理論によつて基礎づけたものである。

わたしはごく簡単にこの時期のレーニンのブルジョア革命理論を解説することとしよう。

民主主義革命における二つの戦術（一九〇五年六―七月）

レーニンは、プロレタリアートの指導性という理論のもとで、さきに述べたマルクス・エンゲルスのブルジョア革命理論の二つの足――永続革命論と「平民的・農民的反対派」という理論をみごとに統一したブルジョア革命理論を展開した。レーニンはそれをつぎのように要約している――

「プロレタリアートは、實力で専制政治の反抗をおしつぶし、ブルジョアジーの動搖性を麻痺させるために、農民大衆を味方にひきつけて民主主義的變革を最後まで遂行しなければならない。プロレタリアートは、實力でブルジョアジーの抵抗を撃破し、

農民と小ブルジョアの動搖を麻痺させるために、半プロレタリア分子の大家を味方にひきつけて社會主義的變革を完成しなければならぬ。これがプロレタリアートの任務である」(『民主主義革命における社會民主黨の二つの戰術』—國民文庫一二二頁)。

このように、レーニンはマルクス・エンゲルスの永續革命論を勞農獨裁の發展論として——プロレタリアートと全農民との革命的民主主義的獨裁(前掲書九一頁以下)からプロレタリアートと半プロレタリアとくに貧農との革命的社會主義的獨裁への發展として、説明している。それは、マルクス・エンゲルスでそうであつたようにたまたかう同盟であるばかりでなく、マルクス・エンゲルスの同盟論を權力形態としての獨裁論にまでたかめているのである。こうしたレーニンの勞農獨裁論の素材はすべてマルクス・エンゲルスの思想のなかにある。永續革命論・「平民的」農民的反對派」論・獨裁論などはすべてマルクス・エンゲルスのすぐれた思想であり、レーニンは、一九一一年『選舉鬭争の原則的諸問題』のなかで、ボルシェヴィキの勞農獨裁論をマルクスの「平民的」農民的反對派」の理論につないでいる。しかし、レーニンはこれらすべてを統一してかれの勞農獨裁論を創造したので、それはもはやマルクス・エンゲルスの思想の單なる繼承でなく發展であり、偉大な創造であつた。それはかれの一九〇三年綱領關係の論文にせめかれたブルジョア革命戰術ともかなりちがつている——たとえばプロレタリアートと貧農との同盟の位置づけの相異を見よ。

わたしはこの問題をもう少しくわしく説明する必要がある。

I ボルシェヴィキとメンシェヴィキとの戰術的對立

ブルジョア革命に關するボルシェヴィキとメンシェルヴィキとの戰術的對立は一九〇三年第二回黨大會で兩者が

分裂するよりも遙かまえにはじまつていたといえる。一八九五年四月レーニンがスイスではじめてブレハノフに會つたとき、ブレハノフはレーニンに「あなたは自由主義者たちに背をむけるが、われわれは彼らに顔をむける」といつたと伝えられるが（マルクス・エンゲルス・レーニン研究所編『レーニン傳』——國民文庫版四二頁）、レーニンとブレハノフとのこの點での對立は（舊）イスクラ編輯局内でもつづいた（前掲書八七—八八頁）。こうした對立は、いうまでもなく、兩者の個人的な對立でなく、當時の社會民主黨の内部に底流していた日和見主義と革命主義との對立であつて、それが第一革命にさいしてハッキリとあらわれたのである。問題の核心はブルジョア革命におけるブルジョアジーの位置づけにあつた。

メンシェヴィキはこう規定した——ブルジョア革命はブルジョアジーにとつて有利なものをもたらすだけの革命であるから、ブルジョア革命はブルジョアジーにまかしておくべきで、「社會民主主義者が臨時政府をつくり、または臨時政府に参加するならば、さらに、ブルジョア諸階級を革命の事業に背をむけさせてしまい、それによつて革命を弱めてしまうものだ」（メンシェヴィキ派のチフリス委員會の意見——『民主主義革命における社會民主黨の二つの戰術』前掲書一一三頁）。こうしてメンシェヴィキはブルジョア革命の指導權をブルジョアジーにあげわたし、プロレタリアートをブルジョアジーの追隨者にしてしまふ戰術をとつた。メンシェヴィキは人民蜂起の勝利の結果として出現する臨時革命政府と「全人民的憲法會議を組織することを決定する何らかの代議機關の革命的發意」とを同一視し（前掲書二八頁）、さらに前者より後者をえらび、地主機關である地方自治會議をそのまま憲法制定會議と宣言させたそれをして憲法制定會議を召集させることを提案した（前掲書六七頁）。この提案はプロシヤ協定議會やフランスフルト國民議會とおなじであつて、マルクスとエンゲルスが三月革命期にドイツ・ブルジョアジーの臆病の標

本として嘲笑したその同じ提案であつた（くわしくはマルクス・エンゲルス選集第三卷参照）。メンシエヴィキは自由主義的・君主主義的ブルジョアジーの水準までおち、ブルジョアジーに追隨して、プロレタリアートにブルジョア革命を放棄させようとしているのである。

ボルシエヴィキはこれとまつたく反對の戰術を採用した。ブルジョア革命はブルジョアジーばかりでなく、プロレタリアートにも有利である——ブルジョア革命は資本主義の基礎を破壊しないで擴めふかめるからブルジョアジーの利益をあらわしているが、同時にプロレタリアートに政治的自由をあたえ、それによつてプロレタリアートの終局目標である社會主義實現を容易にする。だから、唯一の徹底した革命的階級であるプロレタリアートは、ブルジョア體制の解放のためばかりでなく、自分の利益のためにもブルジョア革命を指導しなければならない。この革命からもつとも利益をえるはずの「ブルジョアジーにとつては、プロレタリアートに對抗するため、若干の舊時代の遺物、たとえば君主制や常備軍などを支柱とすることが有利であり」（前掲書五一頁）、かれらは眞にツァー政府の轉覆と臨時革命政府とを要求しない。かれらはツァー政府との「取引」をのぞんでいるのであり、プロレタリアートはブルジョア革命を貫徹するためにはこの「取引」を封じなければならぬ。最後に「農民のなかには、半プロレタリア分子とともに小ブルジョア分子もふくまれている。それが農民をも動搖的にし、……しかし、農民の動搖性はブルジョアジーの動搖性とは根本的にちがつている。農民は、いまでは、私的所有を無條件に維持することよりも、むしろ私的所有の主要な形態の一つである地主の土地を沒收するほうを利益と感しているからである。だから、農民は社會主義的にならないでも、つまり小ブルジョアの的であることをやめないでも、民主主義革命の完全な、きわめて急進的な味方になることができる」（前掲書一一九頁）。全體として要約するならば、プロレタリアート

は全農民と同盟して、ブルジョアジーの「取引」を封じ、ツァーリ地主政府を轉覆して、かれらの臨時革命政府、勞農獨裁政府をつくらなければならない。これがレーニンの到達したブルジョア革命戰術である。

註 誤解をさけるためにいつておくが、レーニンはブルジョアジーを農奴主的地主と同じ反動階級とみているのではない。レーニンにとつては、地主は打倒さるべき階級であり、ブルジョア革命期にはブルジョアジーはその妥協性のゆえにその動搖性を麻痺させ中立化させねばならない階級である。このことはブルジョア革命がブルジョアの生産様式の基礎を擴充し深化する變革であることから生ずる必然の結論である。

マルクスとエンゲルスは、ラッサール主義者がブルジョアジーをその他の階級と同じ反動階級と規定したことを、徹底的に批判した（マルクス『ドイツ勞働者黨綱領評注』——國民文庫版『勞働者黨綱領問題』四七一八頁、なお六九頁參照）。

Ⅱ 二つのブルジョア革命

おなじくブルジョア革命といひながら、ボルシエヴィキのいうブルジョア革命とメンシエヴィキのいうブルジョア革命とは全くその意味がちがう。「だから、民主主義的變革の時代に、民主主義のいろいろの段階のあいだの差異と、民主主義のあれこれの形態のちがつた性格のあいだの差異を、ぼんやり見のがして、とにかく、『ブルジョア革命』であり、『ブルジョア革命』の成果である、と『總明ぶる』だけのマルクス主義者は、たいしたマルクス主義者である」（前掲書五四頁）。

レーニンはこの問題をつぎのように要約している——

「もしわれわれが革命を最後までやりとげることができないとすれば、もし革命が、ただお笑い草に憲法制定議會と呼ばれるにすぎない、ツァーリによつて召集される代表會議という形で、オスヴォボジエニエ（自由主義的ブルジョアジーの機關紙——筆者）派流の『決定的勝利』におわるとすれば、それは地主的・大ブルジョアの要素の優勢な革命となるだろう。反對に、もし

われわれが眞に偉大な革命を體驗するめぐりあわせにあるとすれば、もし歴史がこんどは『流産』をゆるさないならば、もしわれわれが、革命を最後まで、オスヴォボジジエニエ流や新イストラ(メンシエヴィキの機關紙で舊イストラとは異なる―筆者)派のうちのところがつた意味の決定的勝利にまでもつてゆけるようになるとすれば、そのときこそ革命は、農民的・プロレタリア的要素の優勢な革命となるだろう」(前掲書四七頁)。

こうしてメンシエヴィキのいうブルジョア革命は「地主的・大ブルジョアの要素の優勢な革命」「立憲君主制への改革」であり、エンゲルスがビスマルク的ドイツ統一をよんだ意味での「上からの革命」であるが、ボルシエヴィキのいうブルジョア革命は民主主義的勞農獨裁——「農民的・プロレタリア的要素の優勢な革命」「民主共和制への革命」である。この二つの革命の相異は占領軍の日本「民主化」政策と中國大革命との相異であつて、いまのわれわれにはこの二つがまったく別物であることをみやぶるのに何のむづかしさもなからう。

ところでこの二つの革命コース——というよりメンシエヴィキの改良主義的コースとボルシエヴィキの革命的コースは、ちがつた近代化の道をうみだしてくる。前者つまりメンシエヴィキの改良主義的コース——「地主的・大ブルジョアの要素の優勢な革命」は、「あまりに決定的に舊時代の遺物を一掃してしまわず、むしろその若干をのこし」(前掲書五一頁)、「だからだらと長びく道であり、國民という一つの有機體のくさつた部分が苦痛をとめないながら徐々に死滅してゆく道」であつて、そのことによつて「もつとも多くくるしむのは、プロレタリアートと農民である」(前掲書五二頁)。後者つまりボルシエヴィキの「農民的・プロレタリア的要素の優勢な革命」は、「急速な、プロレタリアートにとつて苦痛のもつともすくない手術の道であり、くさつてゐる部分を直接に切りとる道であり、君主制およびそれにつきまとう、けがらわしい、不快な、くさつた、そしてその腐敗で空氣をよごしてゐる諸制度

にたいして、譲歩や手加減のもつともすくない道である」(前掲書五二頁)。

註 メンシエヴィキは第二インターナショナルの日和見主義のロシア版である。ラッサールやカウツキーはブルジョア革命を放棄したかどで、マルクスとエンゲルスから叱責されたが、第二インターナショナルの日和見主義者は、かれらが大量におされてブルジョア革命に参加するときにも、實質上ブルジョア革命を裏切る。レーニンはわれわれにこのことを教えている。

かれらは、マルダスト・エンゲルスの「プロレタリアートの獨裁」を否定することによつてプロレタリア革命を否定したが(レーニン『國家と革命』参照)、そればかりでなくブルジョア民主主義革命をも否定した。第二インターナショナルの日和見主義者には、一般に革命論、したがつてブルジョア革命理論はない。

『農民運動にたいする社會民主黨の態度』(一九〇五年九月)

第一革命は、いま述べたように、地主的・ブルジョアの改革と農民的・プロレタリア的革命との對決という基本問題を提出したが、そのためにこれまでの切取地返還闘争を軸とする農業綱領は不充分になつた。農民は切取地、しかも地主が資本主義的に經營している切取地をのぞいたのこりの切取地の返還を要求しているばかりでなく、「いまでは、私的所有を無條件に維持することよりも、むしろ私的所有の主要な形態の一つである地主の土地を沒收するほうを利益と感じているからである」(『民主主義革命における二つの戦術』前掲書一一九頁)。レーニンは『プロレタリアートと農民』・『農民運動の支持にかんする決議についての報告』(レーニン全集八卷所收)のなかで、「ロシア社會民主労働黨は、こんにちの農民運動をもつとも精力的に支持し、農民の状態を改善しうるあらゆる革命的方策を主張し、この目的のためには地主の收奪をも辭さない」と主張した(前掲書二三一・四〇四頁)。

レーニンはこの決議についてのモスクワ郊外オルグの質問に『農民運動にたいする社會民主黨の態度』という別

の論文を書いてこたえた。

モスクワ郊外オルグはこう質問している——「社會民主黨は、機械や高い文化などを持ちいて、集約的に耕作されている地主所有地の收奪を、支持することができるだろうか。このような土地を小ブルジョアの所有者の手に移すことは、たとえ彼ら小ブルジョアの所有者の状態を改善することが、どんなに重要なことだとしても、その經營の資本主義的發展という意味からすれば、一步後退である」と(『農民運動にたいする社會民主黨の態度』——レーニン二卷選集第四卷一四八頁)。質問は核心にふれている。

レーニンはこれにこうこたえている——第三回黨大會の決議は「沒收にいたるまで」のあらゆる政策を支持することによつて古い秩序にたいする農民の革命的破砕を支援しようとしているが、しかし沒收された土地を小ブルジョアの所有者にうつすとは述べていない。われわれは農民が革命的であるかぎり、農民を支持するが、しかしわれわれはさきにすむ。社會民主主義者の全眞髓は「二重の任務」(前掲書一五五頁)——古い秩序に對する農民の革命的破砕を支持するとともに、やがておこる農村ブルジョア階級の反動的・反プロレタリア的傾向に對應するために「農村プロレタリアートを階級政黨に特別に組織する」(前掲書一五五頁)任務であつて、これを一つの簡単な任務に單純化してはならない。

こうしてレーニンは、第一革命期の農民運動の高揚に應じてさきの切取地返還闘争論を全地主地沒收論にたかめるとともに、『民主主義革命における社會民主黨の二つの戦術』に集約されたブルジョア革命からプロレタリア革命への發展の戦術としての勞農獨裁論の階級的内容の發展理論を農業綱領に適用して、ブルジョア革命期における全農民の革命的農民委員會と農村勞働者の特別の組織という二重の組織を提案したのである。

『一九〇五—七年のロシア第一革命における社會民主黨の農業綱領』（一九〇七年）

レーニンは一九〇五年四月の社會民主黨第三回大會と一九〇六年四月の第四回大會とのほぼ一ヶ年の期間に大きな飛躍をした。レーニンは、第三回大會で第一革命の指導方針——永續革命論としての勞農獨裁論をうちだした。それは第四回大會では土地國有論に發展した（一九〇六年三月レーニン『勞働者黨農業綱領の再檢討』參照）。

レーニンのブルジョア革命戰術がここまで發展してきたとき、それはもはや市場理論とその理論によるロシア經濟の分析にはいりきらないものとなつた。一九〇三年正式の綱領となつた切取地返還闘争論は切取地でも地主が資本主義的に經營している土地の返還を要求しないのであるから、それは農奴主的土地所有と資本主義的經營（地主・農民をふくむ）との對立論を前提していた。だからこそ、切取地のなかの農奴制的經營部分だけを沒收するという政策がでてくるのである。しかしいまや本來の地主地であろうが切取地であろうが、またそれが資本主義的に經營されておもうとしないとかかわらず、全地主地を沒收するとすれば、しかも農民が強力にそれを支持しているとすれば、それはすでに農奴制度と資本主義一般との對立論では説明され基礎づけられないで、地主と農民との對立論から説明されねばならない。さらに、『ロシアにおける資本主義的發展』が實證するように、地主地にも農民地にも資本主義的經營が發展しているとすれば、地主と農民との對立論は同時に地主的資本主義的發展と農民の資本主義的發展との對立論でなければならなかつた。こうしてレーニンは地主地の沒收と土地國有化の政策を、それがあたらしく發見した農業資本主義の客觀的な發展法則——いわゆる二つの道の理論で基礎づけ、この理論のうえにそれを展開した。だから永續革命としての勞農獨裁論・その展開としての土地國有論と二つの道の理論——

『二つの戦術』と『農業綱領』（わたしは『一九〇五—七年のロシア第一革命における社会民主黨の農業綱領』を以下こう略記する）——とは全く内的關連をもつてゐるのである。

二つの道の理論は市場理論とあなごでなく、市場理論からの質的發展である。レーニンは、さきに引用したスクヴォルツォフ・ステパーノフあての手紙のなかで、みづからこのことをみとめて、「一八八三—一八八五および一八九五—一八九九年（一八九九年に『ロシアにおける資本主義の發展』はでた——筆者）に終結的に且つ正しく解決されてゐた問題のはかに、二十世紀の歴史は我々に一つの第二の問題を提起した。……そしてイリニン（レーニン——筆者）は、私の深く確信するところによれば、彼が自己の書『發展——筆者』の第二版への序文において、それから資本家的な農業的發展の二つの種類の可能性が生ずること、およびこれら二つの種類の間の歴史的闘争はいまだ終りを告げてゐないことを指摘したとき、正しかつた』（『ロシアにおける資本主義の發展』——岩波文庫版上巻一五—一六頁）と述べてゐる。『農業綱領』はまさしくこの二つの道の理論と土地國有論とを展開してゐる。

註 わたしはレーニンのブルジョア革命戰術の發展と關連して、『發展』と『農業綱領』との關係について書いてきた。しかし兩者は理論的にどういふ關係にあるのであろうか。もう一度くりかえそう。

『發展』したがつて市場理論は自然經濟が商品經濟へ、そして資本主義經濟へ發展してゆくことを論證するものであり、したがつてそこでは地主經濟の資本主義化と農民經濟の資本主義化とが對立的でなく全く平行的に論じられる。『農業綱領』の二つの道の理論は、地主經濟と農民經濟との資本主義化——したがつて市場理論と『發展』とをことごとく前提しながら、そのうえで地主經濟の資本主義化と農民經濟の資本主義化との對立・闘争を實證するものである。

だから、二つの道の理論を市場理論からきりはなして、「二つの道の提起にとつて……富農經營の發展が必要であるという考へは理論的にも歴史的にも誤つてゐる」（山崎隆三『農民的農業革命の歴史的條件』——社會經濟勞働第一集四二頁。なお近藤康男編『農業經濟研究入門』二六頁前後参照）などということは、完全に誤つてゐる。それは半封建・半植民地中國に關する毛

澤東の農民階級區分論にてらしてもあきらかであつて、こうした見解は、全く近代化を志向しない金縛りの地主・小作人對立論——講座派理論に、二つの道の理論を進展させようとするものである。

I 二つの道の理論

『農業綱領』は内容からみて二つの部分にわかれてゐる。第一章はいわゆる二つの道の理論にあてられ、第二章以下はこの理論をふまえてレーニンのあたらしい土地國有論を展開している。まず第一章の二つの道の理論から紹介しよう。

レーニンは、かれが市場理論で捨象した事實から、二つの道の理論をはじめている。レーニンは説明する——「一千萬の農家が七三〇〇萬デシャーチンの土地をもつてゐる。二萬八〇〇〇の家柄のよい、そしてなりあがりの地主たちが六二〇〇萬デシャーチンの土をもつてゐる。これが農民の土地鬭争の展開される分野の根本的な背景である……われわれがつくつた土地所有の規模はけつして經營規模に一致するものではない。資本主義的大農業は純粹なロシアの各縣ではまつたく背後にある。支配的なのは封建的大土地所有のもとの小規模耕作である」(朝野勉譯『農業綱領』一八一—一九頁、ソ同盟一九五四年英譯版一八一—一九頁)。こうした事柄は『ロシアにおける資本主義的發展』のなかにも關説されてはゐるが、そこでは理論的には捨象され、事實としては過少評價されていた。その封建的大土地所有と小規模耕作との對立——封建經濟の基本的經濟法則——基本矛盾が二つの道の理論の出發點となる。

だが、この對立は靜止してゐるものの對立、單なる封建的大土地所有と小規模耕作との對立ではなく、「ブルジョアの發展の道」における對立である。「鬭争の中心はロシアの農奴制度のもつともいぢるしい權化であり、もつともつよい支柱であるあの農奴制の大土地所有である。商品經濟と資本主義との發達は絶對的な不可避性をもつて

この遺物の終りをつける。この點でロシアの前にあるのはただひとつ、ブルジョアの發展の道だけである」(前掲書三六頁、英譯四一頁)。この「ブルジョアの發展の道」は封建經濟の基本矛盾に對應して二つの道となる。

プロシヤ型の道 それは「地主的經營の改造」であり、その場合には「農奴制的地主經營はだんだんブルジョアの、エンケルの經營に成長し、農民にたいし數十年にわたるもつともくるしい搾取とカバールを宣告する」(前掲書三七頁、英譯四二頁)。これは實質上『ロシアにおける資本主義の發展』第三章に具體的に述べられているコースである。

アメリカ型の道 それは「地主的な大土地所有の廢止」の道であり、「革命的な手段によつて社會機構から農奴制の大土地所有の『こぶ』をとりぞき、そのうちこの大土地所有なしに資本主義的農業企業者の道にそつて自由に發展する小農經營を先頭にしてすすむ」方法である(前掲書三六—三七頁、英譯四二頁)。これは家父長的農民がブルジョアの農業企業家へ轉化する道であるが、それは實質上『發展』の第二章でくわしく分析された。

註 序ながら、レーニンはイギリスが典型的にアメリカ型の道をたどつたとはみていない。つぎの文章をみよう——「ドイツでは、中世的土地所有形式の改造は、いわば、改良主義的におこなわれ、慣習に、傳統に、徐々にエンケル經營にかわつていた農奴制的領地に適應しながらおこなわれた。イギリスではこの改造は革命的に、暴力的におこなわれた、しかしこの暴力は農民大衆にむけられ、かれらは重税でくるしめられ、村からおいはられ、移轉し、死滅し、移住した」(前掲書八一頁、英譯一〇一頁)。イギリスでは、地主がドイツより「革命的に、暴力的に」農民を清掃したのであつて、農民が地主を清掃したのでないと、レーニンはいつているのである。

こうして『發展』のなかで分析された地主經濟のブルジョア化と農民經濟のブルジョア化とは、ここでは封建經濟の基本的經濟法則——封建的大土地所有と小農經營との對立の發展として、農奴制的經濟の資本主義經濟への

發展と小農民經濟の資本主義經濟の發展との二つの道として、述べられている。レーニンは、社會民主主義者がこれらのどの道を支持すべきかと自問して、こうこたえる——プロシヤ型の道である一九〇六年のストルイピンの農業改革を支持するなど考えるのは「俗流マルクス主義だけである——この種をあのように熱心にまいたのは、ブルジョアジーと舊制度とが鬭争するときはブルジョアジーを支持しなければならぬといふたい、さげび、こん願し、しやべるブレハーノフとメンシェヴィキである。いやそうではない。生産諸力（この社會的進歩の最高の尺度）の發展のために、われわれは地主型のブルジョアの進化ではなく、農民型のブルジョアの進化を支持すべきである」と（前掲書四二頁、英譯四九頁）。なんとならば、プロシヤ型の道はカバールと農奴制度とをながく溫存して生産諸力の發展をおくらせ、資本主義の發展をのろくして農民とプロレタリアートをばかりしれないほどい貧乏とくるしみにおとすが、アメリカ型の道は生産諸力のもつとも急速な發展と商品生産の枠内での農民大衆のもつともよい生活條件を意味するからである。レーニンは「生産諸力の發展」という立場から、プロレタリアート解放の條件をつくりだす資本主義的生産諸力の發展という立場から、プロシヤ型の道に反對してアメリカ型の道を、つまり農民を支持した。

レーニンにとつて、二つの道の理論は農業資本主義の客觀的な發展法則であつた。だがまた、レーニンにとつては、この客觀的な法則は矛盾の、階級鬭争の發展法則であつた。だから、二つの道の理論は同時にブルジョア革命における戰術理論であつた。プロシヤ型の道を支持することは『民主主義革命における社會民主黨の二つの戰術』にいう「地主的・大ブルジョアの要素の優勢な革命」・立憲君主制への改革を支持することであり、アメリカ型の道を支持することは「農民的・プロレタリアの要素の優勢な革命」・民主共和制への革命——ブルジョア革命にお

ける勞農獨裁論に味方することであつた。メンシエヴィキとボルシエヴィキとの『二つの戦術』が、『農業綱領』のなかに二つの道の理論という農業理論によつて基礎づけられたのである。

註 『農業綱領』で、レーニンは以前とは比較にならない明瞭さで、小ブルジョア社會主義ナロードニキの祕密をあきらかにしている。レーニンはナロードニキの反資本主義的精神を説明していつている——「ナロードニキ經濟學の根本的なまちがいのひとつは、かれらが農業資本主義の源泉としてもっぱら地主的經營をかんがえ、農民の經營を『人民的生産』と『勤勞の原理』という角度からながめた點にある」と(前掲書三九頁、英譯四五—六頁)、またナロードニキは「資本主義の地主的ブルジョアの變種にたいする批判が資本主義一般にたいする批判であるかのような幻」(前掲書一六五頁、英譯二二〇頁)をもつていたと。古典的ブルジョア革命のイデオロギーをとく鍵がここにある。

II 土地國有論

レーニンは社會民主黨第四回(統一期成)大會への提案解説とみられる『勞働者黨農業綱領の再檢討』のなかに切取地返還論争論をみずから批判し、あたらしい土地國有論を展開したが、『農業綱領』ではかれが発見した二つの道の理論に立脚してさきの土地國有論を全面的に展開した。わたしはごく簡単に『農業綱領』のなかに展開された土地國有論を要約しよう。

註 レーニンは土地國有論を二つの道の理論によつて基礎づけたが、兩者は分離できるものである。土地國有論はアメリカ型の道の極致であり、したがつて二つの道の理論をかならず前提しなければならぬが、逆に二つの道の理論、したがつてアメリカ型の道が土地國有論になるとはかぎらない。フランス大革命における封建的土地所有の撤廢、さらに中國大革命の封建的土地所有の撤廢などはアメリカ型の道であるが、土地國有ではない。

だから、土地國有化政策が現實的政策でなくなつたから、二つの道の理論も通用しなくなると考えるものがあるとするれば、そのひとはこれと二つの道の理論の關係をよつたく理解しないひとである。

第四回黨大會ではメンシェヴィキのマスロフの提案した土地公有案とレーニンの土地國有案とがもつとも對立し、土地公有案が勝利して社會民主黨のあたらしい實質上の農業綱領となつた。レーニンは土地公有案を批判して土地國有案をつよく擁護した。

マスロフの土地公有案は「農業的複本位制」土地所有の二重構成を提案した——「革命の勝利的發展」の場合には沒收した地主地を社會的所有（森林・河川および移住地フォンドの國有化と沒收地主地の自治體公有化）に移すが、しかし農民および小土地所有者一般には現在の土地所有をみつとめることを、提案した。レーニンは一つずつその論據を論駁しつつ、土地公有論に土地國有論を對置した。

農民の動向（『農業綱領』第二章參照）

メンシェヴィキは複本位制の一つの論據を、農民が國有化に反對するだろうという點、農民がかねらの土地とくに分有地の國有化に反對し、プロレタリアートに對して全國的蜂起をするだろう點にもとめた。ところが、農民や農民を代表するナロードニキ派代議士は第一國會と第二國會で、メンシェヴィキの豫想に反して、國有論に味方した。なぜだろうか？「ロシアの農業進化はふたつの可能な形——地主的ブルジョアの進化和農民のブルジョアの進化的形をもっているが、この進化の經濟的土台を理解できない點に、わが公有化論者のおめてたさの根本がある。一部（地主地）は封建的で、一部（分有地）はアジア的な中世的土地關係および土地制度を『清掃』しないで、農業のブルジョアの變革をおこなうことはできない」（前掲書八二—三頁、英譯一〇四頁）。農民の農業革命のためには、封建的大土地所有の撤廢ばかりでなく、農民の分有地の中世的制限の撤廢も必要であり、その理由から農民は分有地の國有化に賛成したのである。こうしてレーニンは二つの道の理論を農民の要求と結合して、そこから公有論――

「複本位制」論に反對して國有論を護つた。

理論的基礎(『農業綱領』第三章)

「經濟的現實を土台とする土地國有化の概念は、商品的資本主義的社會のカテゴリーである。この觀念のうち現實的なものは、農民が考えたり、ナロードニキがはなしたりしているものではなくて、この社會の經濟的諸關係から生まれ出るものである。資本主義的諸關係のもとでの土地國有化は地代を國家にうつすことであつて、それ以上でも、それ以下でもない」(前掲書一〇四頁、英譯一三六―七頁)。

土地國有は資本主義のために封建的・中世的な私有を撤廢することであり、だからここていう土地國有とはブルジョア社會のカテゴリーである。ブルジョアの所有形態の一つとしての土地國有とは、自由な農業投資をさまたげるブルジョアの土地私有を廢止し、したがつてブルジョアの土地私有からうまれる絶對地代を撤廢するが、ブルジョアの農業生産そのものからうまれる差額地代を廢止せず、それを國家にひきわたすにすぎない。そうした意味で土地國有はブルジョアの土地所有形態の最高形態である。だが、そうしたことをここにくわしく説明することはできない。讀者はみずから『資本論』第三卷をひもとくべきである。

ところで、マスコフは絶對地代を否定し絶對地代を差額地代に解消してしまふ。これでは、ブルジョアの土地所有としての私有と國有との相異はなくなつてしまうこととなる。「農業複本位制」を主張するマスコフの土地公有論は、一つにはここから生ずる。

政治的評價(『農業綱領』第四章)

ここまでのところでは、土地公有論にたいするレーニンの批判は、もつぱらその「農業複本位制」論とりわけ分

有地を社會的所有からきりはなして農民所有地としてのこすことにむけられていて、公有と國有との問題には直接にむけられていないといつてよからう。なぜかといえば、分有地を公有化しても、國有とおなじく、中世的諸制限をも絶對地代をもなくしてしまえるからである。レーニンが公有案でなく、とくに國有案をとつたのは政治的考察からである。

メンシエヴィキが土地國有化でなく土地公有化をとつたのは、土地國有の場合には反革命が復活し反動攻勢をかければ土地國有はすぐくつがえるが、自治體公有の場合には中央權力が反革命勢力によつて奪取されても自治體公有はかならずしもくつがえらず、反革命中央權力に對抗できる、と考えたからである。

レーニンはメンシエヴィキのこうした考え方に徹底的に反對する。メンシエヴィキのこうした考え方は、プロレタリアートと農民とが中央權力を奪取せずに、ツァーを打倒して勞農獨裁權力をうちたてずに、農民的農業革命ができることを前提している。メンシエヴィキの志す「地主的・ブルジョアの要素の優勢な革命」のもとで農民的ブルジョアの進化的道が完遂できると考えている。そうしたことは不可能であり、農民大衆を革命から遠ざけるものである。メンシエヴィキのこうした考え方はまた、地主の支配する自治體のもとで農民的農業革命ができることを前提しており、市町村が經營する電車・水道・ガス事業を社會主義と考える自治體社會主義と軌を一つにしている。近代社會の權力形態は中央集權以外のものでありえない。

レーニンの土地國有論はマルクスの地代論とレーニンの二つの道の理論とを『二つの戦術』に展開した勞農獨裁論の方向に完全に統一して、勞農獨裁論を農業綱領のなかで完成したものであつた。それはレーニンのブルジョア革命理論の最高の所産であり、またそのために當時のブルシエヴィキたとえばスターリンでさえ即座には理解でき

なかつたものであつた。スターリンは黨第四回大會では、レーニンと意見を異にして、土地分割論者であつた(『農業問題』・『農業問題について』・『農業綱領の再検討について』)とくに『第一卷の著者序文』——スターリン全集第一卷收載。

註 レーニンはかれの土地國有論がいつもただししいとは思つていなかった。かれは、『農業綱領』第三章第七節「どんな條件があると國有化が實現できるか」で、土地國有論の歴史的條件を嚴密に規定している。

「このような手段(土地國有——筆者)は、むしろ、『わかい』ブルジョア社會でとびれるであらう——なぜなら、この社會はまだその力を發展しておらず、その矛盾を徹底的に展開しておらず、直接に社會主義的な變革をめざすあの力ずよいプロレタリアートをつくりだしてないからである」(前掲書一三〇—一頁、英譯一七四—五頁)。このことを、レーニンはマルクスの『剩餘價值學說史』から論證している。

三 レーニンの勞農獨裁論の構造

いままで紹介してきたように、レーニンのブルジョア革命理論はロシア第一革命期に完成した。

レーニンのブルジョア革命理論の基本構造は、マルクス・エンゲルス理論の特徴が勞農同盟論であつたのに對し、勞農獨裁論であつたといえるであらう。マルクス・エンゲルスにとつて、ブルジョア革命は封建的所有關係と絶對王制とを打倒してブルジョアの諸關係の道を清掃するものであつたが、そのブルジョア革命を完遂できるのはブルジョアでなく「平民的」農民的反對派」つまり勞農同盟であつた。だが、この勞農同盟はたたかいぬくが、マルクス・エンゲルスにとつては、それはブルジョア革命の權力となることなく、ブルジョアまたは小ブルジョアが革命權力となるものであつた。マルクス・エンゲルスにとつては、ブルジョア革命について勞農同盟論はあつたが、勞農獨裁論は稀薄であつたといえる。レーニンはマルクス・エンゲルスの勞農同盟論を發展させて、そ

れをたたかう同盟としてばかりでなく、ブルジョア革命の權力形態たる勞農獨裁の理論にまでたかめた。さらにレーニンは、マルクス・エンゲルスのブルジョア革命からプロレタリア革命への發展轉化の理論たる永續革命論を發展させ整理して、それを勞農獨裁發展理論として確立した——ブルジョア革命段階ではプロレタリアートは全農民と同盟し、プロレタリア革命段階ではプロレタリアートは農村半プロレタリアートと同盟するという勞農獨裁發展理論を確立した。マルクス・エンゲルスの勞農同盟論とレーニンの勞農獨裁論とのこうした相異——兩者の發展關係はプロレタリアートの客體的なそして主體的な發展の相異にかかつていたのである。

註 イギリス革命・フランス大革命・ドイツ三月革命などの古典的ブルジョア革命とロシア革命との相異はここにある。この點はきわめて重要である。

いままでわが國では一般に、イギリス革命・フランス大革命の成功とドイツ三月革命の流産とを對比し、兩者の相異をブルジョアジの進歩性の問題から説明しようとした。マルクス・エンゲルスもその點を強調するのを忘れはしなかつた。だが、マルクス・エンゲルスとレーニンは、わが國の流行理論のように、ブルジョア革命の成否をブルジョアジの動向にかかわらせるようなことよりも、はるかに多く勞農同盟にかかわらせた。この點がわが國のブルジョア革命史學では往々忘れられている。

こうして、勞農同盟がブルジョア革命の基礎範疇であるとすれば、勞農同盟が勞農獨裁をかちとる條件のなかつたイギリス革命・フランス大革命・ドイツ三月革命などのブルジョア革命とロシア革命の戦術との相異・發展はまことに大きい。

こうしてレーニンはマルクス・エンゲルスのブルジョア革命段階の勞農同盟論を勞農獨裁論にまで發展させたのであるが、さらにレーニンは勞農同盟論・勞農獨裁論を基礎づける農業理論——二つの道の理論を完成した。二つの道の理論は、すでに紹介したように、資本主義の發展を資本主義一般からでなく封建社會の基本的經濟法則——基本矛盾の發展から對立的に把握したものであり、そうした理論だけがはじめてブルジョア革命の經濟理論であること

とがでざるのである。

一九五四年九月初稿・一九五五年二月再稿・同年十月三稿

追記

いままで連載してきた『マルクス主義におけるブルジョア革命理論の發展』は、わたしが書いてきた『マルクス・エンゲルスのブルジョア革命理論』・『レーニンのブルジョア革命理論』と近く掲載豫定の立命館文學法學部の池田誠氏執筆の『毛澤東のブルジョア革命理論』とで、終る豫定である。なお、これらの三つの主論文をおぎなら意味で、マルクス・エンゲルスのイギリス革命論・フランス大革命論をかかれなければならないが、『マルクス・エンゲルスのイギリス革命論』はヒル、コスミンスキの紹介論文というかたちで、尾崎芳治君によつて執筆されるであらう。最も重要な古典的ブルジョア革命であるフランス大革命については、適當な執筆者が見當らないので、割愛することとする。

執筆者紹介

穂積 文雄 京都大學教授

堀江 英一 京都大學助教授

岸 田 理 京都大學大學院學生